

これからの医療の話をしよう

倶知安厚生病院 総合診療科 濱本 航

ご紹介いただいた由仁町立診療所の島田先生には学生時代から大変お世話になっており、このような機会を頂いたことに深く感謝を申し上げたい。

若手医師の声を吸い上げる本コーナーの趣旨に則り、北海道の医療を支えてきた先輩の皆様には失礼すぎて、面と向かって言えないようなことを書こうと思う。4つのテーマについて述べる。

①医療の効率化。2019年9月、厚労省は全国の公立病院などの統廃合の検討をすべきリストを公表し、医療者のみならず地域住民にも大きな波紋を呼んだ。「地元の病院がなくなるとは困る」「地域の住民を見殺しにするのか」といった意見も聞かれる。実際に地方では入院可能な施設がなくなり、また在宅診療もできず「地元で最期を迎える」ことができない地域もある。その一方、医療費は増大の一途をたどっており、日本の国家予算における社会保障費は約35兆円と税収の半分以上を占めている。病床維持のため多くの赤字を生んでいる病院も少なくなく、行政からの補助金が前提の病院も多い。一定の所得以上の75歳以上の高齢者を対象に、医療費2割負担についても議論されている。昨今は医師や看護師を含めたメディカルスタッフも不足しており、長時間労働が常態化している施設も少なくない。

②外国人診療。当院でも特に冬期間は外国人が多く、夜間救急外来の半数以上が日本語の通じない外国人という日も少なくない。外国人診療は言語の問題のみならず、医療背景、社会背景が異なるため我が国、自分の住む地域では当たり前だと思えることが通用しないことが度々ある。特に外国人の看取りの際には宗教上の配慮が必要になるケースも散見される。中には保険がないため支払い能力がなく「とんずら」する患者もいる。次の③救急医療とも関連するが、「救急車はタダだしすぐに来るし、待たずに診てもらえる」ということは訪日外国人の常識となっているようで、中には軽症にもかかわらず「今から救急車で札幌の病院へ運べ！」などと無茶苦茶な要求をしてくる者もいる。こういった事情から、医療現場には外国人対応に慣れたスタッフの配置が望ましいだろうが、それにはさらなるコストが生じる。

③救急医療。救急外来の不適切使用の問題もあり、現場を疲弊させている。日本人、外国人問わず救急外来に来る旅行者の多くが夜間診療の必要がない軽症患者であるが、「明日は移動だから病院に来れない」などといった都合で深夜の救急外来を受診している。中には歩けるのに「タクシーが来ない」という理由で、救急車で来院する患者もいる。ツアー会社や宿泊施



札幌市出身、倶知安に移住して4年。仕事の後は毎日温泉でリフレッシュ。休日は旅行に出かけ、医師のワークライフバランスについては最先端を行っている自負を持っている。

設などが搬送できないことを理由に軽症でも救急車を呼ぶように促すケースもある。当地域でも救急車の台数に限りがあり、遠方への転院搬送などがあると域内救急車が減るため、必要な現場への救急車到着が遅れることも懸念される。救急車の適正使用を促すため、救急車の有料化が検討されている。一律有料化、医師が必要であったと認めた場合のみ無料などが議論されているようであるが、安易な119番通報が減ること、その一方で必要な救急搬送を減らさないような価格、条件設定を期待している。

④周産期医療。我が国の周産期医療は疑いなく世界トップレベルである。そのため、「無事に生まれて当たり前」が常識となっていること、社会構造の変化から高齢出産や合併症のある妊娠などリスクが増加している。より一層周産期医療への負荷は増大している。私は周産期医療を担う先生方、スタッフには敬意を表さずにはいられないわけであるが、周産期医療については産婦人科医や助産師の不足が深刻で、地元で賄うことが難しい、または膨大な赤字覚悟で自治体などからの援助を得ながら周産期医療を担っている医療機関もある。

ほかにも専門医の問題、医師偏在の問題、過重労働と働き方改革など、医療界には喫緊に解決しなければならない多くの問題を抱えているが、誌面の都合上今回は割愛する。私が地方の拠点病院で日々勤務をしていて考えていることは、「持続可能な医療とは何か？」である。命はお金では買えないわけであるが、補填できない、または補填に無理のある赤字の医療を継続していくことは不可能である。病院の機能集中は医療資源の集約・効率化と医療費抑制に一定の効果はあるものと考えている。実際、ここ数年病院や有床診療所の無床診療所化といった規模縮小が道内のあちらこちらで見られる。このような医療資源の集約・効率化には病診連携、病病連携や病院と地域の福祉サービスとの連携が不可欠である。こうした問題を含んだ今後の医療についてさまざまな視点から議論を重ねていきたい。が、先輩の皆様には失礼すぎて、面と向かって言えない…。

次号は今まで一緒に仕事をさせていただいた仲間であり、この3月に倶知安を去られる佐藤南斗先生にバトンを渡したい。